
戦争の被害者

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦争の被害者

【Nコード】

N1770M

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

三人それぞれの視点からお送りします。

第一話 恋人の話。

恋人の話

恋人の話

まるで地獄の底から発されているかのような声だった。

そして人はここまで出来るのかと半ば感心するほどに長い、長い咆哮だった。

でも、ずっと続くかのように思えたソレも途絶えた。

それも突然に、不自然なぐらいにあっけなく、終わったのだ。

「ああああ・・・」と消え入るような声が最期だった。

まだ叫び足りないとしてもいうような余韻が残って、重い沈黙が場を支配する。

息苦しいぐらいに。それどころか、息もまともに出来ないぐらいに圧倒的な沈黙。

いつそ、この部屋から出てしまいたいぐらいだった。でも、それは出来ない。

こんな状態の愛しい人をこのままこんな部屋にひとり残すわけにもいかない。

この人は悲しい人だ。とても哀想な人で、とても残酷な人。

自分の事を見ている人がいるというのに、こちらのことなんてまるで気づかない。

こちらのことなんて目にも入らないどころか、認識さえしてない。とても残酷な人。

なのに、自分は死んだ人のことを思って、嘆き、悲しんでいる。ひどく、残酷な人。

彼が死んだのは、私も悲しい。

それどころか、彼は私の好きな人だったのに。

なのに、何であなたが嘆くの？

なのに、何であなたが悲しむの？

あなたが殺したのに……

あなたより、私のほうが悲しむべきなのに。

なのに、何であなたのほうが悲しいって思われないといけないの？

あなたが殺したんだよ。

彼を殺したのは、あなた。

あなたが殺したんだ。

あなたが殺した。

でも、それはしょうがないんじゃないの？

でも、それは終わったことじゃなかったの？

これは戦争なんだから、仕方なかったんじゃないの？

だからあなたを憎むのをやめたのに。

だからあなたを好きだという気持ちを認めたのに。

だって、彼は敵国のスパイだったんだよ？

彼は私の恋人で、あなたの親友で、

でも、彼はスパイだったんだよ。

あなたは正しかった。でも、間違っていた。

でも、戦争はまだ終わらないんだよ。

あなたは戦争を終わらせる責任がある。

じゃないと、彼が死んだ意味、なくなっちゃうじゃない。

あなたは生きなきゃ。

だから、立ち上がってよ。

戦争を終わらして。

もう、悲しみなんてこれ以上つくらないで。

こんな思いをするのは私だけで十分。

こんな思いをするのはいっかだけで十分。

だから、戦争を終わらして。

こんな悲しみを、なくして。

だからお願い。立ち上がって。

立ち直って。どうか、悲しまないで。

強く、生きて。悲しまないで。

二人で、幸せになりましょう。

もう、三人には、戻れないのだから。

こんな風に、彼を急ぎ立て、追い詰める自分は、
もう、壊れてしまっているのかもしれない。

彼のような咆哮はしていないけれども、私の方が彼以上に、
取り返しの付かないところまで、悲しみ、壊れてしまっているのか
もしれない。

軍人の話

軍人の話

目が覚めた時は霧がかかったように頭がぼんやりして、何も考えられなかった。

でも、時が経つにつれ頭がはつきりしてきて、記憶を思い出してくると、身体が震えだした。歯の根が合わなくてガチガチと音が鳴る。

涙が両目から絶え間なく溢れ出ていて、ただ、恐怖に震えている。

ここがどこだとか、

男なものに見つとも無く震えて泣いているとか、そういうことは、はなから頭がない。

ただ、ただ、

自分の感情には関係なく、身体が震える。

これは別に俺が恐怖を感じているのではなく、目が覚める前の記憶が、自分が死ぬという、記憶だったからだ。身体が条件反射でその記憶に対して恐怖しているのだ。

身体が恐怖に支配されて、ぜんぜん動かない。

それでも、力を振り絞ってようやく一言、声に出す。

「俺は 生きているのか」

恐怖に支配された身体が作り出す声は、

心に反して、小さく、

頼りなかった。

でも、震えてはいなかった。

心の平静を表すかのように静かだった。

己の震えることしか知らないかのような身体と

静かで取り乱すことを知らないかのような平静な心が

とてもアンバランスだった。

だが、ふと思い、

今までのことが嘘だったかのように心を取り乱す。

自分が発した声を聞き、

自分が生きていることを改めて認識した。

今、俺が取り乱している理由は、自分が生きているという事実だった。

普通なら、そこは安堵するべきだが、自身としては自分が生きているという事実は恐怖に値することだった。

いや、正確に言うとするなら、生きているということに恐怖しているのではない。

自身が生きていることから推測される自分の未来に対して恐怖しているのだ。

でも、どこかで、そんな自分を冷めた眼で見つめる俺がいた。

俺がいた国は今、戦争をしている。

俺は軍人だ。はやく国に戻り、国を守らなければ。

そのこともどこか遠くて、まだ眠っているかのようにぼんやりと思っていた。

でも、あることに思い至って、『帰りたくない』と強く思った。

俺はもう、死んだとされているだろうから。

もし、そうでなくても、戦争に参加して死ぬだけだ。

俺の国はもう負けるんだから、さっさと白旗を揚げればいいのに。

フト、そう思った。

運悪く、他国のスパイだと思われて俺は殺されるのかも。

なら、国に帰らなければいいのだ。

……マイナス思考に陥っているな。

そうすれば、死ぬ必要はない。

だから　　国に帰りたいと思う。

心が矛盾している。

帰れば死ぬ。だが、あの国には、親友が、恋人がいる。

思い出が脳内を早足で駆け巡る。

せめて、彼らの安否だけでも確認したい。

そう、切に願った。そこからどんどん想いが溢れていく。

これは郷愁というものか。そして同時に帰ったら、帰った後を想い、身体が震える。

それでも、帰ろう。あの国へ。帰ろう。あの街へ。帰ろう。彼らのもとへ。

震えた身体を鞭打ち、引きずり、それでも帰ろうという想いで向かう。

信じてくれないかもしれないけど、俺はあの爆発で、あの戦いで、生き残ったんだって。

彼らは信じてくれるだろうか。

恐怖がないといったら嘘になるけど、彼らだけは信じてくれそうな気がする。

少し、自惚れ過ぎだろうか。しかし、他の人たちは信じてくれないだろう。

あんな、激戦地で戦って、あの爆発の中心地近くにいた俺が残っているなんて。

あの爆発だ。

信じてろって方が土台無理な話だ。自分なら信じられないだろう。

あの気のいい上官は死んでしまっただろうか。

死んでしまっているのだろうか。

あの大柄だけどよく気が利くあの青年は死んでしまっただろうか。

死んでしまっているのだろうか。

もう他に、誰も生き残ってはいないのだろうか。

誰も生き残ってはいないのだろうか。皆、もういない。残されたのだ、俺は。

生き残っていて欲しい。

でも、彼らが、信じてくれるなら、俺は上官が、青年が死んでいてもいい。

酷い考えだ。それでも、藁にも縋る想いで思った。希望はもう、ないけれど

彼らが生きていれば、他はどうでもいい。本心でそう思う。心から、そう願う。

たとえ自分が殺されても、あの二人が平和で、幸せに生きていればいい。

帰りたい。彼らのもとへ。会いたい。彼らに会いたい。

笑顔を見せて欲しい。

理不尽なことも、悲しいこともなく、幸せに、笑って、生きていて欲しい。

希望を失くすことなく、純粹に、まっすぐに、生きて欲しい。

彼らを守りたい。だから、

帰ろう。あの国へ。帰ろう。彼らのもとへ。

「帰ろう。彼らのもとへ。たとえ、死ぬことになっても。」

親友の話

親友の話

殺した。それを認識することは出来ても、理解することは不可能だった。

俺が、殺した。現実感が全くない。

それでも、目の前に今、友であったモノが転がっている。

人じゃない。モノだ完全に、言いようのないほど、モノだ。

腕は無造作に投げられていて、腹からは失血死に至るほどの大量の血。

その開かれた両の目は瞳孔が開き、

焦点は定かではなく、どこを見つめているのかわからない。

以前その目に捉えていたのは、俺と、彼女と、そして三人の幸せだった。

こいつは昔からただ、それだけを望んでいたのに。

なのに、俺は

信じてやれなかった。

敵国のスパイだと思い込んで、上層部の連中の言葉に甘く騙されて、

“だから” っていうのはただの言い逃れだけど、

友を、親友を、信じてやれなかった。

友を、親友を、手にかけてしまった。

それを理解するのを拒否するように俺の身体は絶えず震える。

まるで拒否反応でも起こしているかのようにだと、客観的に思ってしまった。

何をすれば償える？

何をすればあがなえる？

お前がいらないなんてこと、考えられない。

お前はどこにいるんだ？

ここにはいない。この街にいない。この国に、この世界に。どこだっていい。ただ、お前が生きていれば、どこだっておまえは、どこにいるんだ？

あの瞬間が、脳裏に焼きついている。

最期まで、笑っていた。

俺たちを見て、安心したって、言って、笑っていた。

心から安堵した、本当に幸せそうな、笑みだった。

今でもあの笑顔が忘れられない。

いままで、何度も、何度も笑顔を見てきた。

それどころか、笑顔以外はほとんど見たことがない。

俺がこういうのも、変な話だけど、最期の笑顔が一番、よかったと思える。

自分が死んで行こうという時に、

自分たちの顔を見て、心から安堵したように、一番の笑顔で笑っていたんだ。

自分を刺した奴を、自分を殺そうと殺意を持ってナイフを刺した奴をみて、笑ったんだ。

目を閉じなくても、思い出せる、たくさんの思い出。

三人一緒に幸せに暮らしていた、あの日々。

何をやるにしても楽しくて仕方がなかった、平和な頃。

なのに、今、頭の中で一番よみがえる記憶は直前の映像。

この指に残るゆびきりの感触でも、

幼い時に握った手の温もりでも、

花のような甘くさっぱりとした匂いでもない。

見たこちらまでも幸せになるような、あの笑顔とも違う。

一番印象的なのはずっと身近にあった、それらではなく、

むせかえるような、濃厚で存在感のある血のにおい。

それに混ざって微かだけど確かにある腐臭。

ソレら。

それらを鮮明に、覚えている。

あいつが死ぬ時の、人に、

人の身体にナイフを突き立てた、あの感触。

硬くなくて、それどころか柔らかい。

でも、ナイフがするりとは入らない、

実のよく詰まった、重い、肉の感触。

グジャやブスツと音を立てそうなの、感触。

あいつが死ぬ時の、身体から溢れだしたあの夥しい程の量の血。

俺が刺した傷口から溢れ出す血飛沫に濡れていく自分。

そしてその凄まじく嫌な光景。

突き立てたナイフの傷口から止め処もなく噴射するように飛び出す、

人の体温を削り取る温かな、どろりとまとわりつく、

赤い水。視界が赤一色に染まった。

あいつが死ぬ時の、死人のそれが発するのとおなじ、

おぞましいにおい。

腐臭。腐敗臭。

生理的嫌悪感と吐き気を誘う、あのにおい。

コレ、があいつとは思いたくない。

涙が溢れ出してくる。

でも、俺の脳はまだ麻痺したままなんだ。

どこか、胸にぽっかりと穴が開いてしまっているかのような、

そんな気分。何も、わからない。

いや、何も、わかりたくない。

一番、守りたかったのに。

一番、大切だったのに。

おれは、守りたかったものを、大切なものを、

自分の手で、もぎ取った。

それでも、あいつは

最期まで、笑っていたんだ。

俺は一生、忘れられない。

あの、幸せそうな笑顔が頭から離れない。

もう戻れない。

あの時には、戻れない。

あの幸せな時には戻れない。

俺は、あの時、なんの躊躇いもなく、

あいつを殺そうとした。

俺が殺した。

一瞬で、楽しい記憶も、大切なものも、

幸せな未来も、すべてを失った。

自分の手でそれらをもぎ取った。

ソレがどういう行為か、わかってなかった。

わかってるつもりでも、本当の意味でわかってなかった。

人の命は容易く、どんなに強くみえたって、

弱く、小さい、儚いものだって知っていたはずなのに。

なのに、俺は

守れなかった。

それどころか、自分で、

壊した。

あの、幸せを。

小さくて、普通で、些細。

でも、それでも、とても幸せだった、大切な日々。

もう、二度と戻らない。

戦争の話

戦争の話

昔、ある国に戦争が起きました。

突然のことでした。

近隣諸国をも巻き込む、大きな戦争にまで拡大しました。

ある時、戦争の最前線となっていた場所で、大きな爆発が起こりました。

そこにいた者たちはもちろん全滅です。

地面が抉れ、身体も、何もかもが吹き飛び、跡形もなくなりました。いつそ、清々しいほどにすべてがなくなりました。

それは両国に大きな被害をもたらしました。

なぜ、そんなことが起こったかわかりません。

爆発は大きな被害をもたらしましたが、それをきっかけに、

戦争は停戦になり、戦争は幕を引きました。

ある青年の話です。

その青年は爆発のあった時、その場にいました。

あの爆発で、ひとりだけ生き残りました。

青年が意識を取り戻し、国に帰った時には、

しかし、戦争から2年もの時が経っていました。

そのとき国は敵国のスパイだと青年に判断を下しました。

国としては、停戦になって2年という時は、

非常に危ないのです。

停戦。終戦ではない。

両国とも国力も回復してきた。

会戦するのなら、この時ほど都合のよい時期はなかったのです。

しかも、秋という、実りの時期に

死んだはずの青年が一人帰ってきたのです。

スパイとしか、思えなかったのです。

そして青年の恋人と親友を使い、

油断したところを、殺そうと思ったのです。

お膳立てはすべてやりました。

青年が必死の想いで国に戻ってきたのは、

恋人と親友に会いたかったからです。

ちゃんと、幸せに、生きているかを確かめたかったからです。

青年は、国に戻ったら殺されるかもしれないと、懸念していました。

それでも、国に戻り、二人に会いました。

二人に会えて、青年は安堵しました。

青年は、二人に経緯を話しました。

でも、殺されました。

青年の、親友に。

信じてもらえませんでした。

青年は、殺されました。

それによって、戦争は停戦から開戦へとなりました。

青年の親友は、嘆き、悲しみました。

友の死に、深く悲しみました。

そして記憶を、なくしました。

そして軍人になりました。

青年の恋人は、青年を嘆き、悲しみました。

青年の親友は青年の恋人と友達でした。

青年の死を悼み、青年の親友と慰めました。

そして青年の親友に恋をしました。

でも、青年の親友は気づきません。

どこまでも平行線のまま、

青年の親友は記憶をなくしたのです。

記憶をなくした青年の親友に青年の恋人は甲斐甲斐しく世話をしました。

その彼女に青年の親友は恋をしました。

二人は青年のことなどまるで気にせず、
愛し合いました。

まるで、青年の存在なんて最初からなかったかのように。
そしてまた、二人は戦争に身を投じました。

戦争はまだまだ終わりそうもありません。

戦争は、いつ、終わるのでしょうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1770m/>

戦争の被害者

2010年10月11日07時45分発行